

今年の佐賀県文学賞は第60回。文学賞の歴史を振り返る年でもある。

今まで選者を務めた人のほとんどが応募者として県文学賞に参加、経験を積み重ねて審査員の席に座らせて頂いている。と同時に自らも俳句を詠み続けていく。自省を込めて今年の応募作品から感じたことを述べさせて頂きたい。

一般の部の応募は106名。長年俳句を詠まれている方々だと思われるが、慣れによる文字遣いの雑さが見られた。送り仮名の間違い。書き慣れた略字、当て字などは作品を送る前に再度確認してほしい。せっかくの良い俳句が台無しになる。有季定型は基本であるが季重なりも避ける。身近な郷土の自然や習慣などを詠まれた場合、知名度が低いと読む人に届かない場合がある。

応募者の年齢が高くなり、老いや介護、孫俳句の応募が毎年沢山あることも頭に入れておいて欲しい。類句に陥りやすい面もある季語の説明はしない、安易な擬人化は避ける。

ジュニアの部は小学生110名。子どもたちの発想の豊かな句を楽しく読ませていただいた。夏休みの遊び、動物や植物の観察、両親や友だちとのふれあいの句などがあり、選ぶのに迷った。応募する小学校が少なく入選者が片寄っているのが少し残念であった。

中学校は452名。クラブ活動、学校生活、夏休みの出来事などが楽しく俳句に詠まれている。基本的なことだが俳句は五七五、その中に季節のことばが入る。また梅雨と虹、秋風と落葉など二つの季節が入ると俳句が散漫になり読む人の心に届かない。

高校生は2校、12名。今までの応募の中で一番少なかったのは残念であった。

2022年度から始まる「新学習指導要領」で「現代文」が選択科目になると報じられていた。俳句に関心を持つ高校生が少なくなるのではとさみしい気持ちになっっている。

現在、俳句という文化は日本固有のものではなく、海外にもたくさんさんの愛好者がみられるようになってきた。「俳句をユネスコへ」と文化庁への働きかけなどがされている。私たちは俳句で大いに親しみつつ発展させて、世界へ広げていくように努力していきたいと思う。